

## 光明第六号

一、牡牛を殺して横ぐわえにして走り得る獅子は、兎一匹殺すにも獅子の全身の力を使うと言う。小敵をあなどらない者は真に強い。衣服のほころび一つをつくろうにも細心の注意を使う女子は真に良妻であり、賢母である。一円札三枚受け取るにも三度数え得る余裕ある男子でこそ、社会の劇甚なる競争者たり得るの資格がある。

一、正義、正義、遂に正義、正義は永遠の勝利である。槍が降っても剣が飛んでも、正義で通れ、正義で通れ。雲が出て、月の光は曇っても、何時かまた、空晴れわたって、真如の光の輝きを見る時がある。

一、強くなれ、女子よ強くなれ。なぜもつと強くならん。なぜそんなに、もろく征服される。死んでも守れ、殺されて、操を清く生きよ。

### 巻頭の叫び！

一、我々が得る最大なる慰安は、我々の心が我々の為したことを正しいと認めてくれ、我々が大なる艱難と戦ったとき、「汝の意志は強く、汝の行為は正義である」と信じてくれた時である。だから、我々は正しく強く生きようと懸命に努力しても、それは、決して、世間から評判されたり、人から誉めてもらうためではない。心が自分を信じてくれ、心が自分を認めてくれさえすればいいのだ。

二、汝がもし、国家の法律に背いてまでも自分の為のみ考えるならば、汝は下の下の人面鬼心の動物である。汝がもし、法律が恐しさに、悪事をしない人間ならば、汝は下の人間である。汝がもし、世間が恐しかったり、人からよい評判を得たいために、悪事をさけて、善事をする人間ならば、汝は中の人間である。汝がもし、その心の内に理想が燃え、その理想を実現せんために、あるいは汝の心の満足を得んがために、汝の全力を、善事をなさんがためにつくす人間ならば、汝は上の人間たる事が出来る。

明如上人十七回忌に父君を偲んで武子夫人が詠まれたる春愁七首

歌よめとをしへられつる九つの

父がみまへのわれのこひしさ

九僕武子夫人がまだ若く八つ九つの時、明如上人様が歌をおしえられる、その頃のことか思い出されたお心の内は……。

あなかしこ 散らぬ花咲く寂光の  
常世の春に笑みまさん父

あゝ父君は散ることのない花の咲く極楽の変りのない楽しい春に、ニコツとお笑い  
なさつていられよう。

千万の宝はむなし尊きは

おやよりつづく 只此身のみ

千万のお金や宝は、何にもならない、ただ尊いのは親よりいただいたこの心と体ばかり：  
かり：

わが父は 仏のごときおもはして

聖者の如く清くおはしき

天人も花の吹雪にうちまじり

まふや卯月の山荘のには

幸うすき わが十年のひとり居に

こひしきものを 父とし答ふ

武子夫人には、夫がいられたのですが、その人は武子夫人をおいて外国に行き、他の女を妻としていられるそうです。武子夫人は、十年間ひとりで寂しく暮していらる、この十年間、寂しい時、思い出されるは、御父明如上人の御事です、武子夫人の様な身分の尊貴なお方でも、こんな悲哀になれます。

その頃の人をしみれば 父のよはひ

今いまさばとゆびををりつつ

親をなくした人は皆おなじことでしょう。

### 自分で自分の前に額<sup>ぬか</sup>ずけ

歓喜も努力もそこから湧いて出る。

二人の子供がありました。

太郎と次郎の二人の子供がありました。先生から二人とも同様な宿題を出されました。むずかしい問題でしたから、太郎も次郎もわからなかった。太郎は自分の内で一時間二時間と考えてみましたはどうしてもわからない。それでも止めようとはせず、一心に考えましたが、どうしてもわかりません。ついに泣きだしました。太郎は何故泣いたろうか、それは太郎が「あゝ僕は駄目だ、僕にこれがとけないとは何事だろう」と真実の自分が知れたからです。僕はこの問題が出来ないかと一度は泣きましたが、しかし、又一度考えていました。やはり出来ません。しかし、もう太郎は泣いてはいなかった。次郎は学校から帰ると太郎と同じく宿題を考えていたが、やはり出来ない。二度も三度も考えてもその問題は解けなかった。

その明るる日二人とも学校に行った。二人とも出来なかったのに、太郎ははればれとした顔をして、少しも心配らしい様子はありません。次郎はどうも面白くない、す

すまない顔をしていましたが、三郎という友達の所に行き、やつきで写して知らない顔で先生の方をごまかしました。しかし、三郎の力で一時をあざむいた次郎の心の中は、益々不愉快でたまらない。二日も三日も、そしてとうとう真実にはその解き方を知らないで過ぎてしまつて、そんな問題にあたるごとに、好い加減にごまかして行つた。しまいには、それが心細くも気持ち悪くもなくなつてしまつた。

太郎はその朝、先生に幾度考えても出来なかつたことを告白して、教えをこいしました。先生は親切に二度三度となくくりかえして教えてくれたので、とうとう真実わかりました。太郎の心は、雨の後の月夜の様に心にかゝる隈もなく、ああ嬉しいと今心一ぱい歓喜の血潮がたかなりました。その日もその明くる日も、それを知つたのがもとで、わからない事は無い様になつた。太郎の生活は徹底的に自分を知つて、新に築いた光明の生活であり、次郎の生活は、自分を飾り、自分をいつわつた虚偽の生活、濁つた生活であつた。

夜はふけた、自分を自分で考えて見る。

あなたはあなたで自分の事を考えて下さい。もつともつと考えて下さい。あなた自身がどんなに見えますか。自分の智慧は大きいものか小さいものか、自分の財産は多いか少ないか。自分は好い人間かどうか、もつともつと本気で考えて見ましょう。光明を見て、子供らしいと言つたという人がもう何人もありました。何が子供らしいのでしょうか。「入つて下さいと言いました。誰々は、あんな子供らしいものにはと申すのでありません」と言つてきた人が数人ありました。子供らしいと言つて聞うて3見たい。「あなたは、書いてあることのうち一つでも完全に行えたことがありますか」と。自分を自分で考えることが足りない私らは、自分の智慧が足りない、学問が足りないと心からさびしく自分で自分がわかつた時、勉強しようという考えがおきて来るのだ。実に、自分等の学問こそ何という浅いものだろう。

一日に必ず二十頁づつ書物を読むとして一ヶ月に六百頁の書物が一冊、一年にはわずかに十二冊しか読めない。十年たつても首二十冊だけだ。それなのに毎日新しく出る書物がいくらあろう。一度、本屋の前に立つて見てごらん。おどろくべきたくさんさんの書物が光っているではないか。それに、とても毎日二十頁づつ読もうとすれば、勉強しなければならぬ。かくまで、僕らの知識の少く、学ぶべき事の多いことを知つた時、薄い書物を三十冊五十冊読んだ自分らに、時間を大切にしないでいられるか。自分の力の少いのおどろいて泣かずにいられようか。

貧乏だとは言ふけれど 金がない金がないとは口癖の様に言うけれど、心から貧乏だと思ふだろうか。田地が一町ある二町ある、貯金が千円ある二千円ある、家屋敷はわしのものだ、と鼻の先にぶらさげて、人に見せびらかしては見る事があつても、一度これ位の財産でと感づいて、何か考えて見たらうか。僕らが一ヶ月にとても十円の貯金すら出来かねることや、自分の田から取れる物を皆買つても千円とは取れないことや、自分の身代をたたき売つても、二千円か三千円、多いにしても十万円か二十万円しかないことなどを知つて、世の中には一億円二億円という金持（一億円ヲ一円

札ニシテ数ヘタラ五・六年カカル）がいることを思うとき、自分の真実の貧乏になきたくならはせんか。

五反や一町の田を自慢の種にするほど、あさましい心のおこる間は、何で自分の財産の少いの気がつこう。月三十円の収入しかないものが、それ以上の暮しをしたり、一万円の身代の者が二万円の身代の者と同じ暮しをする者には、心の安心も愉快もなく、何時でも「これではいけないが」とは考えながらも、その生活を根から立てかえて、新しく自分相応に出直すほど、徹底的に真実に、如何に自分が貧しいか、又如何に今の自分の暮しが虚偽であり、浮雲の如くつまらないものであることを考えたことはない。それでも世の中には、「金がないから」という者は皆である。金がないなら何故平気で、十二銭も出して、敷島なんか燻らしたり、こうもしなけりや人目が悪い、何かなければ他所に出られぬと、外観を飾って見たいのだろう。それこそ僕らに、真実貧しいという感じがないからである。

次に又、我らは、世の中の評判ばかり気にして暮らす事をやめて、まず第一番に、自分自身をよくよく見ようではないか。自分自身の行いなら、誰よりもよく知っているはずだ。悪いことをしたり、なまけたりして、その後で、世の人が知ろうか、悪く言おうか、と考えてビクビクもので暮らして、その通りを何度もくり返して、人生五十年を終わってしまったて、それがどれだけ価値があろう。臭い物に蓋をして、人が知りはせぬか、どうして隠そうかと駄目な苦心をしたり、こうすれば、人が親切なと言うか、賢いと言うか、立派な人と言うかと、こせこせした価値のない生活を毎日くり返す前に、自分で自分の前にぬかづいて見よう。

自分を正直に赤裸々に自分の心の神の前にさらけ出して見よう。そして自分の心を裁判官にして、厳しく自分を裁判しよう。その時です、その時です。あなたが救われるかどうか。多くの人は、その時きつと身悶えする位つらいでしょう。悲しいでしょう。厳正な心の裁判によつて、如実に、自分の不徳なこと、良いことをしたこと、の少いこと、あまりに悪い行為の多いことに今更ながらあきれるでしょう。しかしながら、この悲しいつらい自覚を真に得た者こそ、大なる歓喜に至るべき人である。

しかし、かゝる裁判の前に出る人は皆かも知れない。しかし、その厳しい心の裁判から来る一時の苦からのがれようとする人がある。監獄に行く様な悪党が、何時も酒にひたつて、心の苦をのがれようとするのもそれである。人を悪く言ったり、陥れたりして、自分の悪を見まいとするのもそれである。しかしながら、その時は如何に自分で自分の心を走らせても、自分の心を逃すことによつて、安心は出来ない。責めらるる心と責める心とは、形と影の如く、はなれないからである。

光明を読めば、気にかゝつてならないとか、夜寝られないと言う方がたくさんあります。その方たちは、今心の厳正な裁判の前に立っている人ではありませんか。臭いものに蓋をして、逃げようとなさるか。もう駄目です。駄目です。それよりも、責められ、責められても、心の言うことをききなさい。飾る気も何もすてて、逃げる心もなく真実を聞いて見なさい。あなたは必ず、大きな大きな後悔の後で、必ず、心から後悔しなければならぬでしょう。そして、心の裁判官の前できつときつと固く誓う

でしょう。その時あなたは、静かに気は平らかに、何かしら大きい力を得て、ズーツと心の奥からの歡喜がわき出していでしょう。

唯、しかし、酒飲む者が、宿酔いで頭の痛い時だけ、悪いことをした、酒は飲まない、今からは飲まないと誓つても、よくなつてしまへば、やはり飲む様な、そんな得手勝手な都合のよい誓いや懺悔でのがれたら、救われるどころか愈々自分自心に曇りをかさねて行くのである。

僕が最も強く、賢く、善く生き得る最初の日は、ただ僕が僕の前に、真実に額づいた日である。人が「私は金を貯めて、家をおこさねばならぬ。」と暗いうちから働いた日、「一銭でも無駄な事には金は出さぬ。」と儉約したりする一ばん初めの日は、その人が「私は貧しい。」又は「いくら金の金がなければ生きられぬ。」と真実自分の前に自分をさらけ出して見たその日である。自分の寿命が五十年だと知り、自分の智慧の極めて小さいこと、知らねばならぬことの絶大なるを知る時||即ち、自分で自分の知れた時||一分を惜しんで学ばねばならぬことが知れて来る。

その知られた最初の日こそ、僕らが勉強する最初の日ではないか。自分のつまらぬ行為や弱い意志やが真実知れて、我と我が心をだいて泣き、大い固い決心に、心が奮ひ起つた日こそは、僕らが正しく、真直に渡つてやる、死んでも正しく、殺されても真直に行つてやると、根強く生き得る首途かたての時ではないか。であるから、貧しいと泣いた者は幸である。自分の愚にあきれかえつたものは幸である。自分で自分を見下げはてた者は幸である。その者は富みつつある。賢くなつている、正しく人として生きつつある。

若い身そらで、毎日毎日夢と活き、夢と暮す人達は何を考えていてくれるだろう。学ぶべきことはないのだろうか。夜学にも出席しないで、何をしてこの春の宵を使うのだろうか。小学校でならつたあんな本でもう十分と思つているのだろうか。光明団の方で二十五六にもなつた方が熱心に夜学に出席せられるのに、十七や十八の人が何をしていなのだろうか。親から送る学資を使つて、何故明日の英語をもつともつと調べないのだろうか。友達は一心になつて勉強しているのに、何故勉強をためておくのだろうか。皆一緒にもとにかえろう、考えよう。真実に自分で自分が知れたなら、もつともつと強くなれます。光明が彼岸に見えて来ます。嬉しくなれます。前にあつた、太郎の生活はわかつたでしょう。自分の前に、自分をなげ出して救われて、光明に向つた幸福な生活です。次郎の生活は、苦しい自分をその上苦しめて、一時のがれの弥縫策によつて、永遠の不幸に泣こうという生活です。神仏は、自分が自分の前に額づいた時だけ存在する。

『雁の羽音の中』から

□……上半略……先生、私はこの話を聞いて、(若い女が姑の悪い悪い家に嫁入って、辛苦している話)人は、皆、自分を敵に見、着るに着る物もない一人ぼっちになった時でなくては、真実の人間になることは出来ないのではなからうか。非常な辛苦困難が身にふりかかった時でなくては光明は見えないのであろうか、働かねば食うことも出来ず、たよるべき者もない旅の空に出なければ、人間味はわからないのなら、私は一生涯何もわからず、幸福者となることは出来ないでしょうか。下略……。 (某女)

□ 貴女の御手紙は可なり長いものでしたが、要点だけぬくと前の様な御問いでしよう。さて、あなたの御苦しみもつとですが、そのお考えはまちがっています。前に書いてあった女の話、あの女は、今人間になりつつあるのではなくて、人間かどうかをためされているのです。人間は辛苦に遭遇する時、人間としての価値がどれ位あるかを試されるのである。言うまでもなく、その試練にあうたびに、一歩づつ人間としての価値を増してゆくけれども、ここに考えなければならぬことは、我らが天の試験即ち困苦に出逢うた時、もし平素何の考えもなしにいて、何の用意もしないでいて、その困苦を無事に通れようか。我らが平素精神の修養をなすべき必要はここにある。

たとへば、貴女<sup>あなた</sup>がもし邪見、嫉妬等の心を平気で表している人であるなら、他人の家に嫁入った時にはすぐ、貴女は苦しい嫁いびりの辛苦に泣かねばならぬ。貴女は決して、今の身の上の辛頑なことを心配することはありません。貴女の身の上が幸福であるならば、心からの喜びを以て感謝の生活をなさい。如何なる身の上の人でも、相應な心配や辛苦を持っているものですが、貴女がもつとつと大い辛苦が来ないかと思われるのは、貴女の修養も手伝わっているのです。しかし二十歳にもならない貴女がこれまでの通りが一生涯だと思っっているならまちがいです。年を取れば、真に語る人もなくなりません。貴女の味方と思っただ人も敵になっっていることがあります。無実の災難にも泣き、自分を信じられないのに、泣くこともあります。(九保武子夫人の話をも考え下さい。) 貴女の真実の人間としての生活は、今までではなくて、これからです。貴女が他家に入ったとき、夫が無慈悲な人であつたら、何とします。夫が失敗して、財産を失つたら何とします。子供がいたら、どんなに教育します。その子供が死んだら何とします。思えば思えば、ああ憶えば、如何に貴女の前途は遼遠でしょう。我らの求める幸福は、火中において涼を感じ、氷雪の中に坐して暖を知る如き幸福である。強くなつて貴女が、清いまゝの貴女が、何か心中求めているならきつと、どんな境遇にも出逢うでしょう。出逢わなければ、それこそ最大な果報者です。

□「苦がないのが物寂しい」……のお答え……

カフ女様、今の辛苦のない幸福を喜びなさい。何を苦しんで心配する必要があるあります。人生の春にあたつている貴女が、幸福だからとて、何が恐しかろう。そのまま唯そのまます感謝しつつ、心から、大きな声で、美しく歌いながら、今日一日を懸命

に暮しなさい。狂風の幸福と何がちがいますよ。ただ、呑気なと言つて、自分のなすことをほつておいて、何とも思わない呑気ではなりません。苦を苦と思わない呑気でなければなりません。

活動は勢力の中心である。

君は男子だろう。それなら、体力精力の続くかぎり他人のために活動したまへ。活動は勢力の中心である。ここに人が五人いる。その五人の内甲という人が病気になる。五人の内最も活動を好む君がその甲のために、看病したり世話したりしてやつたとする。甲は誰よりも一番君を信用するだろう。そして君の言うことなら、他の者が言うことよりもよく聞いてくれるだろう。又乙が五人より外の者と争いを生じた場合に、君が乙をたすけてやつたとする。そして、乙は敵に勝つことが出来たとすれば、乙は君の力に感服するだろう。そして強い者として尊敬を受け、君の言うことは聞いてくれるだろう。即ち君は精力が他人よりも強いために、そこに勢力を得るのだ。かくしてついに丙丁も君の勢力に従つて来る。

すべて如何なる社会においても、最も活動する者が、その社会の勢力を得る。学生仲間でも活動家に勢力があり、権力が集る。一村に於ても、自分の考えを一村におき、一村のために活動すれば、必ず一村に於ける勢力の中心となる。一郡の盛衰を念として、一郡のために活動する者は一郡の勢力であり、一県を眼中に於て、一県のために自分を犠牲にして奔走活動する者は一県に於て勢力をあつめる。

我々は勢力を得んためにのみ活動するのではないけれども、男子の一生は活動である。一分時でも心をゆるめざる活動である。活動は男子の本領である。活動をのぞいては男子の一生は何物もない。故に男子は、常に勢力の中心となる。しかも活動を好んで人一倍活動する者は、必ず、富、位を得る者たることが出来る。我らの活動は我らの知識と経験とによつて、确实と迅速とを得ることが出来る、富の力によつて、活動を大ならしめることが出来る。故に活動を好んで活動し、活動のために活動するものは、即ち勢力の中心となりて、男子としての生を意義あるものたらしめることが出来るし、富と位と経験とを得て一層活動をして有意義のものたらしめることが出来る。

男子よ！ 活動せよ。常に働け、寒くても暑くても、全力をつくして活動せよ。もし活動を好んで一時も無為に暮すことがなく、社会国家の進展を念頭におくならば、その人たる、必ず社会発展の一大中心勢力となり得ることが出来る、世の尊敬を受けることが出来る。活動は、活動それ自身が愉快なるものである。男子の体中に充滿している精力を発散することは男子の快心事である。

社会は社会そのものが一大速度をもつて、常に発展し変化する。我々がもし、その社会にいて、一分時たりとも活動をとどめるなら、すぐ社会から葬られねばならぬ、普通平凡の活動より少しにても大なる活動をするものは、その活動によつて、社会の中心勢力となり得る。

根強く永久に、変りのない活動を一生の間つづけよう。男子の生活は、即ちそれ、男子の生命でなくて何だろう。

## 感謝の涙

□原稿を書いていますと、幾度か、皆様の手紙を綴つてある「雁の羽音」に手をかけます。皆様からいただく手紙は、必ず三度宛は読ませていただきます。

□「会者定離」とは申しながら、本校の島川先生がおやめになり、寺中先生が高田におかえりになりました。一時は三人も先生が足りなかつたが、四月から、岩田（男）、下土井（男）、中高離（女）の三先生が新しく来られました。あゝと喜んだ甲斐もなく、又も、谷本先生が重い病の床におふしになりました。芳の二十三日には、佐々木先生のお父様がお亡くなりました。これが人生の真相です。

□白花様、野菊様、文女様、如月様、光明団の中にも、お金一文出しもせず、手紙一本よこさない人もあるのに、出すべきお金はもうすんでいるのに、その上なおたくさん切手などお送り下さいまして、ほんとにうれしうございます。先月綴器を買いましたも三円ばかりお金がいりました。お金の足りない本部には買いたいののはたくさんあります。皆様からいただいたお金は、きつと立渡す用にお立て致します。

□団費は、毎月チビチビとていねいにお出し下さつては、あまり繁雄になりますから、何ヶ月かを一緒に月三銭でも一銭でもお好きだけの割合でお出し下さい。遠方8の方は切手で送つて下さいませてもよろしうございます。切手なら、二銭切手をよるこびます。

□筆を持つと書くことが多くて、ついつい前からのつづきが書けなくなります。先月のつづきも、この次には書きます。

□どうかどうか、毎日一つづつでもよいから、あなた自身の改革につとめて下さい。第六号が皆様に読まれる頃には、田舎は農業の忙しいさかりです。いくら忙しくても「光明」は、あなたの行くところに連れて行ってやって下さい。そして、読んでやって下さい。あなたには、忙しくてもこれを読む暇と日誌を書く努力とが出るでしょうか。

□半円形の月は中天にかかって清く輝いている。僕が鉄筆をもつて書いているそばでは掘岡高一君、中村為市君、岸田里利君、堀川 徳君、佐々木先生、小使の六人が大車輪で光明を刷つていてくれます。滑稽な話が出ては、時々どつと笑いながら、仕事が出来ています。もう時計が十二時に近い。こうして、毎月の光明が出来てゆく、どうかどうか、こんなに、昼の仕事の疲れをもいとわず、光明のために、つくしてくれる方に衷心感謝して下さい。先月なんか、森君、林様たちに、夜三時まで手伝っていただいたことさえあります。



□黒く横たわっている山々のうねりを見ては、ああ、多くの兄弟姉妹の夢や如何にと、思いはとおく皆様のところに飛んでゆきます。段々暑くなります。梅雨が来ます。お体を御大切に。どうか、精々おつとめ下さい。さよなら。(五月八日夜)